

転落の抒情歌

—A Streetcar Named Desire 試論—

中 地 晃

A Streetcar Named Desire (以下 *Streetcar* と略す) は New York では1947年12月3日に Barrymore Theatre で初演された。⁽¹⁾ Marlon Brando が Stanley を, Jessica Tandy が Blanche を, Kim Hunter が Stella を, Karl Malden が Mitch を演じた。監督は Elia Kazan で, 1949年12月の終演までに855回の公演が行われた。初演当時は, それが与える感動と, sex の扱いについて興奮のうずをまきおこしたが, 賛否両論があったにせよ, New York Critics' Circle Award と Pulitzer Prize を与えられるなど, 批評家の評判は悪くはなく, Tennessee Williams は劇作家の地位を不動のものとしたのである。

1949年10月に *Streetcar* は London で上演され, 道徳問題について論議を呼ぶが, 1951年にはこれを Elia Kazan が映画化した。この映画は Blanche 役が Vivien Leigh に変わったが, 他は New York 公演と同じ cast で, しかも stage production をそのまま撮影したのである。映画は好評で, Vivien Leigh, Kim Hunter, Karl Malden はその演技に対しアカデミー賞が与えられた。その後, 1972年になって *Streetcar* はアメリカの各地で公演されたが, 昔と同じ impact を与えたと Falk は伝えている。⁽²⁾

(1)

Streetcar は抒情的傾向を持ちながら, 極めて客観的に描かれた劇である。上演に際して劇の中心が Stanley であるのか Stella であるのかの議論が生れるのもそのためである。たとえば, Bigsby は, Blanche はうそつきで, その夢はあさはかで, sexuality は破壊的であると言い, Stanley は動物的でありながら作者の尊敬をうけているという。そして作品の基本テーマが survival であるとするならば, 運命に翻弄される人間より運命を支配する人間の方に惹かれるのは驚くにあたらないと言う。観客は墮落と野獣性のどちらを選ぶかと迫られて, どちらにも組することはなく, 登場人物の必死の戦い, つまり, survival と dignity のための戦いに感動を与えられると言うのである。⁽³⁾

たしかに, Blanche は白い蛾のイメージを与えられて描かれるくずれた女で, その行動は世俗

的な価値基準では悪女に見えるように描かれている。彼女は初めての結婚に破れた後、Belle Reve の近くのキャンプの兵士と関係したり、教え子の17才の少年を誘惑したり、Flamingo ホテルで売春をしたりする。そして教職を追われ、町から立退きを迫られて New Orleans の Stella の家へ来るのである。ドラマはそこから始まり、彼女の暗い過去は彼女の必死の否定にもかかわらず Stanley にあばかれて行くのであるが、Stella の所に滞在中も、官能的な女の一面を見せる。着いたばかりの時、そっとウィスキーを飲んだり、Stanley に色目を使ったり、Mitch を誘惑して結婚しようとしたり、新聞配達少年にキスをしたりする。彼女のそのような行動は彼女の過去と重ね合わされて、Londré も言うように、⁽⁴⁾ 観客は彼女をうそつき、偽善者、アルコール中毒、少年誘惑者、家庭の破壊者と見るのである。

そのような観客には野獸的な Stanley が正義の味方のように受取られる。Stanley は動物的であり、ポーカーと、ボウリングと sex だけが生甲斐である男であるが、Blanche の色香に迷わされず Blanche の過去をあばき、友人の Mitch に彼女との結婚を思い止まらせる。嘘を嫌い真実を愛するたくましい男は、ポーカーの夜に暴れたり、食卓の皿を叩き割って、「俺の片付け方はこうだ」と言ってみたり、Stella が出産のため入院した夜 Blanche を rape したりする行動にもかかわらず、初演の時に Stanley を演じた Marlon Brando の人気に支えられて、好意的解釈を受けるのである。

(2)

Streetcar は Blanche と Stanley の conflict を軸として描かれている。Belle Reve を失って Stella を頼ってやって来た Blanche は、粗野で実務的な Stanley に追いつめられ、犯されて発狂するのが劇の筋であるが、それが与える感動は conflict のすさまじさから来るのではなく、Belle Reve を失い、職を失い、Laurel の町を追われた Blanche が New Orleans にも安住の地を見出せず追い立てられて行く姿の哀しい美しさから来るのである。

だが、それは現実社会の道徳を文学作品の中に持ち込む人々には見えないのである。世俗的な価値判断を文学作品の中に持ち込む人々には理解されないのである。E. A. Poe の 'The Black Cat' の主人公をアルコール中毒患者と考え、*The Glass Menagerie* の Laura を自閉症の少女と考えて、それ以上の思考をしない時、文学作品はその深い感動を与えないのである。

Streetcar においては、Blanche を悪女と受けとめる限りは、作品はその意味も美しさも見せない。Blanche は現実レベルでは悪女かも知れないが、*Streetcar* の解釈では悪女と考えてはならないのである。Stanley は彼女をうそつきだと言うが、現実レベルでも、彼女はうそつきとは言えないのである。Stanley はうそ1号として、彼女が純潔な女ではないと言う。

"Lie Number One: All this squeamishness she puts on! You should just know the line she's

been feeding to Mitch. He thought she had never been more than kissed by a fellow!
But Sister Blanche is no lily! Ha-ha! Some lily she is!”⁽⁵⁾

さらに、Blanche が Laurel の Flamingo というホテルで売春をしていて有名となり、市長に退去を求められたことを聞いたと言い、うそ2号として、彼女が17才の教え子を誘惑して high school を追われたことをあげる。これは Blanche 自身が後で Mitch に対して認めることであるが、Blanche は心の中ではうそはついていないと言う。

Blanche: Don't say I lied to you.

Mitch: Lies, lies, inside and out, all lies.

Blanche: Never inside, I didn't lie in my heart.⁽⁶⁾

彼女が Mitch に対し清純をよそおっていたのは、Mitch と結婚して安住の地を見出したためだったのであり、Flamingo ホテルのことも、high school の教師の職を追われたことも、言い出せなかったのである。悪意があつてうそをついたのではなく、不必要な心配はさせたくないというやさしい心づかいと考えることも可能なのである。彼女が自分は心の中でうそをついたことではないと言うのは、そういう意味なのである。Blanche がくずれていったことについては、Blanche が何回か語る悲しい事件のためだったのであり、彼女の傷つきやすい心に対し一抹の同情があつて然るべきなのである。

“...After the death of Allan—intimacies with strangers was all I seemed able to fill my empty heart....I think it was panic, just panic, that drove me from one to another, hunting for some protection....”⁽⁷⁾

さらに、Shep Huntleigh の話は、Stella にも Stanley にも語られ、最後に Stanley にそのうそが見破られるが、絶望状況の Blanche のすぎる夢にすぎず、うそと言う必要はないのである。

また、ウィスキーをすすめられて、一杯が限度だと言ったり、めったに飲まないと言ったり、Stella の方が年上だと言ったり、Stella の手伝いに来たと言ったり、自分が古風な考えをもっていると言うなど、小さなうそがしばしばあるが、それは Blanche が裸電球に paper lantern をかぶせるのを好むのと同様に、現実より想像の世界の方を好むためであり、見逃すべきなのである。

“I'll tell you what I want. Magic! [*Mitch Laughs.*] Yes, yes, magic! I try to give that to people. I misrepresent things to them. I don't tell the truth. I tell what ought to be truth....”⁽⁸⁾

Stanley が Blanche の過去を Stella に語っている時、バスルームで歌っている Blanche の歌の歌詞は、一面において正しいのである。

“Say, it's only a paper moon, Sailing over a cardboard sea—But it wouldn't be make-

believe If you believed in me!”

“It’s a Barnum and Bailey world, Just as phony as it can be—But it wouldn’t be make-believe If you believed in me!”⁽⁹⁾

Blanche の転落に同情の余地があり、Blanche のうそに美しさがあるとの理解があれば、Belle Reve を失った Blanche をナポレオン法典を持ち出して苦しめ、Blanche の過去を調べ上げて Mitch との結婚を妨げ、Blanche を rape して発狂に追い込む Stanley は Blanche の劇の悪役になるのであり、Stanley の描写も悪役に与えられる描写である。

...Animal joy in his being is implicit in all his movements and attitudes. Since earliest manhood the center of his life has been pleasure with women, the giving and taking of it, not with weak indulgence, dependently, but with the power and pride of a richly feathered male bird among hens...⁽¹⁰⁾

Blanche も Stanley に過去をあばかれる前に彼が類人猿に近いといっている。

“He acts like an animal, has an animal’s habits! Eats like one, moves like one, talks like one! There’s even something-sub-human-something not quite to the stage of humanity yet!...⁽¹¹⁾

ポーカーとボウリングにしか興味を示さず、数々の乱暴や粗野な行動をし、Blanche を rape する Stanley を、Blanche の過去を暴露する理由で、truth を追求する champion と考えてよいだろうか。Stella に乱暴し、逃げられた後で Stella を求め Stella に謝ったからと言って、さらに、連れて行かれる Blanche を見て泣いている Stella をなぐさめたからと言って、彼に同情してよいだろうか。Streetcar は Blanche を中心に解釈されるべきである。

(3)

Streetcar は作者の最高作であると言う N. J. Fedder は Blanche の disintegration への作者の集中と、climax となる発狂へ向う緊張の高揚を理由としてあげているが、同時にそれが realistic な mode で書かれながら、幻想に接すると述べている。⁽¹²⁾ Streetcar が緊密な構成を持った迫力のある drama であることは言うまでもないが、それが持つ抒情性が無視される時、この作品の中心は Stanley であるとか Stella であるとかの議論が生れるのである。現実的で動物的な Stanley の行動や、Stanley と Blanche の間を行きつもどりつする Stella の行動から、抒情性が生れる筈はないのである。

Streetcar の持つ lyricism は、大理石のコラムのある南部の大邸宅に生れた Blanche の転落の姿が、作者の同情を受けて、哀切の情をもって描かれることから生れている。

Blanche が Mitch に語る初恋と不幸な結婚の話は、Blanche の現在の絶望的状况を背景としてうら悲しい気分を漂わせる。

“...When I was sixteen, I made the discovery—love. All at once and much, much too completely. It was like you suddenly turned a blinding light on something that had always been half in shadow, that’s how it struck the world for me. But I was unlucky. Deluded ...”⁽¹³⁾

“...We danced the Varsouviana! Suddenly in the middle of the dance the boy I had married broke away from me and ran out of the casino. A few moments later—a shot! ...”⁽¹⁴⁾

“...It was because—on the dance-floor—unable to stop myself—I’d suddenly said—“I saw! I know! You disgust me...” And then the searchlight which had been turned on the world was turned off again and never for one moment since has there been any light that’s stronger than this-kitchen-candle...”⁽¹⁵⁾

大邸宅 Belle Reve を失ったことは、Blanche の最大の悲しみであり、南部の貴婦人から Flamingo ホテルの売春婦への転落の始まりであったが、Blanche の悲しみは Stella への怒りとなる。

“I, I, I took the blows in my face and my body! All of those deaths! The long parade to the graveyard! Father, mother! Margaret, that dreadful way!...”⁽¹⁶⁾

“Honey—that’s how it slipped through my fingers! Which of them left us a fortune? Which of them left a cent of insurance even?... Yes, accuse me! Sit there and stare at me, thinking I let the place go! I let the place go? Where were you! In bed with your—Polack!”⁽¹⁷⁾

Blanche の墮落の姿は、Blanche 自身の語る悲しい思い出としてだけでなく、Stanley が聞き込んで来た話を Stella に語ることで明らかにされるが、Mitch に問いつめられた Blanche はそれをはっきりと認める。

“...That’s where I brought my victims....Yes, I had many intimacies with strangers. After the death of Allan—intimacies with strangers was all I seemed able to fill my empty heart with.... I think it was panic, just panic, that drove me from one to another, hunting for some protection—here and there, in the most—unlikely places—even, at last, in a seventeen-year-old boy but—somebody wrote the superintendent about it—“This woman is morally unfit for her position! True? Yes, I suppose—unfit somehow—anyway.... So I came here. There was nowhere else I could go. I was played out...”⁽¹⁸⁾

Belle Reve から絶望の New Orleans への道を辿った Blanche は、心のやさしい少女であっただけにわれわれの同情を誘うのである。

Stanley : Delicate piece she is.

Stella : She is. She was. You didn't know Blanche as a girl. Nobody, nobody, was tender and trusting as she was. But people like you abused her, and forced her to change.⁶⁹

(4)

Streetcar の持つ抒情性は Blanche の回想の他に、彼女の想像力からも生れている。彼女の想像力は、窮地にある彼女に束の間のなぐさめを与えるが、その想像の世界は、世俗的には嘘と言われるにせよ、抒情詩の持つ美しさを漂わせる。Shep Huntleigh への手紙は投函されることのない夢の手紙である。

“Darling Shep. I am spending the summer on the wing, making flying visits here and there. And who knows, perhaps I shall take a sudden notion to swoop down on Dallas! ...”⁷⁰

“Most of my sister's friends go north in the summer but some have homes on the Gulf and there has been a continued round of entertainments, teas, cocktails, and luncheons—”⁷¹

この Shep の夢は第十場でも繰返され、それが嘘であることが Stanley に見破られるが、Blanche はもし不運がなければ、Shep の妻になったかも知れず、彼女の想像通りになったであろうことを考えれば、この華麗な想像は、彼女の心の絶望の裏返しとして心にしみるのである。

“I wore his ATO pin my last year at college. I hadn't seen him again until last Christmas. I ran into him on Biscayne Boulevard. Then—just now—this wire—inviting me on a cruise of the Caribbean!...”⁷²

Stanley に rape され気が狂ってしまう Blanche は精神病院に送られることになるが、Blanche は Shep Huntleigh のところに行くと思ひ込む。しかし死の影は忍び込み、Blanche は洗っていないぶどうを食べて、海の上で死ぬ自分を想像する。

“...And when I die, I'm going to die on the sea. You know what I shall die of? [*She plucks a grape.*] I shall die of eating an unwashed grape one day out on the ocean... And I'll be buried at sea sewn up in a clean white sack and dropped overboard—at noon—in the blaze of summer—and into an ocean as blue as [*chimes again*] my first lover's eyes!”⁷³

青い海、夏の太陽、白い布に包まれた屍体—Blanche の想像力は作者の同情を受けて抒情詩の世界を見せる。

(5)

Streetcar は緊密な構成を持った抒情的な作品であることは前述したが、言葉の美しさ、symbol の多用とともに音楽、物売りの声等のきめ細かい指示が特に目につく。これは場面のムードを作ったり、人物の心理状態を浮き立たせたりするが、この念入りの音楽の使用は、作品の抒情性を高めている。第一場のト書きにある 'blue piano' は New Orleans のこの地域のムード、つまり作品全体のムードを作る。

A corresponding air is evoked by the music of Negro entertainers at a barroom around the corner. In this part of New Orleans you are practically always just around the corner, or a few doors down the street, from a tinny piano being played with the infatuated fluency of brown fingers. This 'blue piano' expresses the spirit of life which goes on here.⁶⁴

第一場では、Belle Reve が失くなったことを Blanche が Stella に告げる時、'blue piano' の音楽が高まり、Blanche が過去の結婚のことを聞かれた時、ポルカの曲が遠くかすかに聞える。第二場では絶えず 'blue piano' の音が聞こえ、Stella が妊娠していることを Blanche が聞く時、'blue piano' の音は高まる。Stella と Blanche が町へ出る時、Red hots! という物売りの声がきこえるが、家の中でポーカーをやる Stanley 等の笑い声が聞える時、'blue piano' と hot trumpet の音が高まる。

用いられる音楽は多様である。第三場で Blanche がラジオをつける時、流れる曲はルンバであり、Stanley が暴れた夜、皆が帰った後では、"Paper Doll" の曲がゆっくりとさびしく響く。その後、Stanley が Stella を呼ぶ時は、低音のクラリネットがうめき、第四場で Stella と Stanley が Blanche の前で抱擁する時の音楽は、'blue piano' とトランペットとドラムである。

第五場では、トランペット、ドラム、'blue piano' が用いられる場面があるが、第六場で Blanche が Allan との初恋、結婚、Allan の自殺を語る場面は、ポルカの音楽が高まったり、急に消えたりする。第七場では、バスルームで歌う Blanche の歌が、Stanley のあばく Blanche の過去の話と対比され、場面は遠いピアノの高まりで終る。第八場では Negro entertainer の歌がきこえ、Varsouviana の音楽が静かに流れるが、第九場ではポルカの Varsouviana が Blanche の心にまで入り込む。Mitch が訪ねて来た時、そのポルカはとまるが、また始まり、遠くのピストルの音が、Allan の自殺と彼女の心の中で重なる時、その曲はとまる。Blanche が最後の希望をかけた Mitch が、結婚を断りに来た時は、音楽でなく、花売りの声が無気味に場面を盛り立てる。

“Flores. Flores. Flores para los muertos. Flores. Flores.”²⁹

遠いピアノで終る第九場の後の第十場ではサーカスの音楽が静かに流れるが、ジャングルの叫びのような声や、‘blue piano’の音や、列車の音が入り込み、BlancheがStanleyにベッドに運ばれた後ではhot trumpetとdrumの音が大きくなる。

最終の第十一場では、Blancheがバスルームから出て来る時Varsouvianaの曲が聞えるが、彼女が支度をしている時、教会の鐘がなる。それは彼女が海の上で死ぬことを語っている時にも聞える。精神病院からの医者と看護婦が来ると、Varsouvianaがかすかに聞え、ドラムも静かにひびく。Stanleyがトランプを切る音も聞えるが、Blancheが奥へ逃げ込む時はジャングルの叫びや音とともにVarsouvianaの曲が無気味にゆがむ。看護婦のHelloの声は峡谷にこだまするようにひびき、Stanleyの声もこだまを残す。看護婦はNow, Blanche!と言い、こだまもそれを繰返す。

Echoes [rising and falling]: Now Blanche—Now, Blanche—Now, Blanche!²⁹

Blancheは遂に連れて行かれ、Stellaは泣きじゃくりStanleyがなだめるが、最後に聞えるのは‘blue piano’とトランペットである。

[The luxurious sobbing, the sensual murmur fade away under the swelling music of the ‘blue piano’ and the muted trumpet.]²⁹

(6)

各種の音楽や、町の物売りの声や、その他の音響の効果的使用は、Streetcarのムードを作り、Blancheの悲劇の与える感動を増幅している。Desire行きの電車に乗って、Cemeteries行きの電車に乗りかえて（現在ではバスになっている）Elysian Fieldsで下りたBlancheは、彼女の一生の象徴のような経路を通して、妹Stellaの家にとどりつくが、そこは彼女にとって「わな」だったのである。

“...I’m anxious to get out of here—this place is a trap!”²⁹

彼女は安住の地を見出せず、Mitchとの結婚の夢も破られ、rapeされて狂い、精神病院送りとなるが、その精神病院こそ彼女にとってElysian Fieldsなのである。Blancheが看護婦につれられて去って行く時、Stellaはさめざめと泣く。

[She sobs with inhuman abandon. There is something luxurious in her complete surrender to crying now that her sister is gone.]²⁹

Stellaだけではない。Blancheとの結婚を断ったMitchすらテーブルに顔を伏せて泣く。彼女の悲運の生涯に涙を流すのはStellaやMitchだけでなく、悲劇の与える感動に動かされる観客であるが、その背後には作者の涙がある。

Streetcar が抒情的であるのは転落する女 Blanche の運命の悲しさと、過去の夢にすぎる Blanche の回想と想像力のためであると考えられるが、Blanche に注がれる作者の愛情が、作者と Blanche を一体とし、作者が Blanche を通して感情表現をしていることが、*Streetcar* の抒情性の根源である。1955年7月26日にローマで書かれた Donald Windham 宛の手紙は、1946年に New Mexico の Taos で受けた盲腸の手術と、それが癌であったことと、それ以後作者におおいかぶさる死の影について書かれているが、*Streetcar* に関しては、それが彼の死の影に関係があることが述べられる。

...This was where the desperate time started, and how it started, which was to produce my best work, "*Streetcar*," and later, "*Cat*," perhaps all the ones I've written since '46...⁶⁰
1946年の夏には Williams は自らの死を予期し、Nantucket 島で死ぬことを決めるが、Carson McCullers の見舞いに元気づけられ、1947年の秋までには *Streetcar* の中にその危機の時代の感情を投入する。

..., and by the late fall of 1947 I was able to release all the emotional content of the long crisis in "*Streetcar*." I think my work is good in exact ratio to the degree of emotional tension which is released in it...⁶¹

作者は、対話形式で客観的に描かれる劇の中で主観表現を行っているのであり、それが Blanche を通して為されているのである。癌であることを知り、死を見すえて、後悔にさいなまれた作者の苦しみを載せているのは、単純で粗野で動物的活力にみちた Stanley でなく、心がやさしくデリケートで、後悔に苦しめられ、絶望の淵へ落ちて行く Blanche であり、そこからこの作品の抒情的美しさは生れているのである。'Portrait of a Madonna', 'The Lady of Larkspur Lotion', 'Hello from Bertha', 'This Poperty is Condemned' などの短篇劇において Blanche 的人物が同情をもって描かれるのも、それを裏づけている。

Tennessee Williams は lyrical dramatist ではなく、dramatic lyricist だという Harold Bloom の言葉は、⁶² *Streetcar* の作者としての Williams についてこそ言われるべきであると思われるが、作者自身も *Streetcar* が一種の lyric であり、二度と書けない作品であると述べている。

...In a sense, writing of this kind (lyric?) is a losing game, for steadily life takes away from you, bit by bit, step by step, the quality of fresh involvement, new, startling reactions to experience, the emotional reservoir is only rarely replenished, by some such crisis as I've described to you at such length, and most of the time you are just "paying out", draining off...⁶³

Streetcar の上演において、それが持つ抒情性を観客に伝えられないとすれば、その演出は失敗であると言わざるを得ないのである。⁶⁴

すぐれた小説や劇は、その表面に描かれる story の背後に、つねに、ある普遍的な appeal を持つ。Steinbeck の *Of Mice and Men* は、そこに語られる George と Lennie の物語を通して、Nobody never gets to heaven. という普遍的意味を訴え、*The Grapes of Wrath* は Joad 一家の苦難を通して、人類の通って来た苦難を感じさせる。Saul Bellow の *The Victim* はその物語の背後に、豊かさを達した人間につきまとう恐怖の影を描き、*The Glass Menagerie* では Laura の姿に、現代社会における芸術家の姿が象徴される。すぐれた作家は個人的経験を一般化するのであり、普遍的な意味を表わす題材を直観的に選ぶように思われる。

Streetcar はそのような作品の一つであり、緊密に構成された story が、象徴的な背景、小道具、衣裳、人物描写、色彩、そして音楽に支えられて、深い普遍的な意味を表わしている。繊細な感受性とやさしい心と豊かな教養をもった Blanche が、粗野で動物的で生活力の強い Stanley に追いつめられる姿には、上品、優雅、寛大、誇りなどの南部の伝統が、北部の産業主義によってくずされて行く姿や、教養や芸術を追求人々が利益追求の社会で翻弄される状況が象徴されているのが感じられるのである。*Streetcar* はそのような普遍的な意味を抒情的ムードの中で表現している傑作なのである。

注

- (1) cf. Signi Lenea Falk, *Tennessee Williams*, pp. 59-61.
cf. Felicia Hardison Londré, *Tennessee Williams*, pp. 95-96.
cf. Dakin Williams and Shepherd Mead, *Tennessee Williams*, pp. 149-152.
- (2) Falk, *Tennessee Williams* p. 61.
- (3) C. W. E. Bigsby, *A Critical Introduction to Twentieth-Century American Drama*, p. 60.
- (4) Londré, *Tennessee Williams*, p. 79.
- (5) *Sweet Bird of Youth and Other Plays* (Penguin Plays), p. 186.
- (6) *Ibid.*, p. 205.
- (7) *Ibid.*, p. 205.
- (8) *Ibid.*, p. 204.
- (9) *Ibid.*, pp. 186-188.
- (10) *Ibid.*, p. 128.
- (11) *Ibid.*, p. 163.
- (12) Norman J. Fedder, 'Tennessee Williams' Dramatic Technique,' *Tennessee Williams: 13 Essays*, p. 232.
- (13) *Sweet Bird of Youth and Other Plays* (Penguin Plays), p. 182.
- (14) *Ibid.*, p. 183.
- (15) *Ibid.*, p. 184.
- (16) *Ibid.*, p. 126.
- (17) *Ibid.*, p. 127.
- (18) *Ibid.*, pp. 204-205.
- (19) *Ibid.*, p. 198.

- ⑳ *Ibid.*, p. 165.
- ㉑ *Ibid.*, p. 165.
- ㉒ *Ibid.*, p. 209.
- ㉓ *Ibid.*, p. 220.
- ㉔ *Ibid.*, p. 115.
- ㉕ *Ibid.*, p. 205.
- ㉖ *Ibid.*, p. 223.
- ㉗ *Ibid.*, p. 226.
- ㉘ *Ibid.*, p. 216.
- ㉙ *Ibid.*, p. 226.
- ㉚ Donald Windham, *Tennessee Williams' Letters to Donald Windham 1940-1965*, p. 306.
- ㉛ *Ibid.*, p. 306.
- ㉜ Harold Bloom ed., *Tennessee Williams's A Streetcar Named Desire*, Editor's Note.
- ㉝ Donald Windham, *Tennessee Williams' Letters to Donald Windham 1940-1965*, p. 306.
- ㉞ 文学座公演「欲望という名の電車」1987年